

日本の科学研究はこの10年間で失速し高水準の論文数の減少が著明となり、英科学雑誌ネイチャーは科学界のエリートとしての地位が脅かされていると警告する調査結果を公表しました。世界の主要な科学誌に掲載された2016年の論文数を分析した結果、4年間で英国が17.3%、中国が47.7%とそれぞれ増加したのに対し我が国は8.3%の減少で、大きく後退していることが報告されました。より広範囲の科学誌に掲載された2015年の論文数では、世界全体は10年間で80%増加し、特に中国、米国などが高い伸びを示したのに対し日本は14%にとどまり、全体に占める割合は7.4%から4.7%に低下し存在感の下落が際立っていました。特に分野別では医学と関係の深い生化学・分子生物学や免疫学に関する論文は30%以上の減少がみられたようです。本年度は残念ながらノーベル賞の受賞者はいませんが、3年連続して受賞するなど日本の科学研究は輝かしい成果を誇っており研究大国の一つとされています。生理学医学賞は昭和62年に利根川進先生が多様な抗体で生成する遺伝的原理の解明でこの分野において我が国最初の受賞をされて以来、平成24年には様々な細胞に成長できる能力を持つiPS細胞の作成で山中伸弥先生、平成27年には線虫の寄生によって引き起こされる感染症に対する新たな治療法に関する発明で大村智先生、平成28年にはオートファジーの仕組みの解明で大隅良典先生が受賞されました。また、毎年ノーベル賞の時期になると受賞する可能性のある候補者として我が国の研究者の名前がしばしばあげられ基礎研究の層の厚さを感じます。しかし、受賞者あるいは受賞候補者の研究は過去に行われたものであり、現在の研究に対する我が国の状況から将来は今までのようにはノーベル賞受賞者がでないのではないかと危惧されています。

我が国の科学研究の失速の原因は研究費の問題や研究環境など様々な問題が指摘され研究離れあるようです。医学部の卒業生をみると臨床医から研究者となり素晴らしい実績をあげられた先生もたくさんおられます。以前は入局すると大学院進学をしない者でも臨床研修の後、医局に戻り博士号を取得するため一定期間大学で内容は別として臨床研究、基礎研究に従事するのが一般的であったように思いますが、現在は博士号よりも専門医取得を希望する医師が多く研究を希望しない人が増えているようです。医学部の研究の底上げをするには前の制度も悪くなかったように思うこともあります。私の入局した徳島大学医学部第三内科も殆どの医局員は卒後一般病院で研修した後、数年後には大学に戻って研究をしていました。私も大学で1年研修した後、一般病院で臨床研修を行い、大学に戻ってからは臨床をする一方で生化学教室に出向き指導を受けながら研究に従事しました。学位を取得した後、卒後5年目の冬に留学し、帰国後大学医局の生活を経て高知病院に平成12年に赴任しもうすぐ退官という時期を迎えています。この間、時々でこうしておけば良かったなどの反省することはありますが、卒業して現在までの歩んできた道に私自身は非常に満足していますし、後悔はありません。今、自分自身を振り返ってみて、大学で指導されながら行った臨床研究や基礎的研究がその後の臨床の知識を深めることに役立ったよ

うに思います。医学部を卒業して基礎研究の道に進む人はほんの一部で多くは臨床医になります。優れた医師になるためにも、私はある期間大学のようなところで落ち着いて勉強することが必要でないかと思う一人です。しかし、新専門医制度が導入され研修病院に進む医師も増えていくことから受け入れ病院の果たす役割も今まで以上に重要になると思いますし、大学以外の研修病院に進んでも全ての医師が何らかの研究に一度は従事することを期待しています。また、そのような機会を多くの人が持つことで研究に興味を抱く人が増加し結果的に我が国の研究レベルを押し上げることに繋がるのではないかと思います。

この度高知県医師会医学雑誌第 23 巻が発刊されることとなり、発表内容の総数は 46 編でその内訳は総説 9 編、特集 3 編、原著 9 編、症例報告 14 編、その他 11 編でした。臨床現場で診療を行いながら臨床研究や症例報告の論文を作成することは簡単にできることではありませんので素晴らしいことと思います。私は卒業以来、基礎的研究、臨床研究、症例報告を問わず学会発表で終えるのではなく論文にしなければならぬと教育をうけてきました。論文を書くには関連の文献を調べて自らの仕事について考察することが必要です。また、論文として発表する意義を明確にしなければなりませんし、査読者からの疑問点にも答えられなければ採択されません。論文を作るには大変な労力を要しますが、投稿した論文の採択通知を見たときの感激や文字になったときの喜びは言葉では言い表せない大きなものがあります。しかし、論文を書くということは手順を含め簡単ではなく、ある程度の訓練が必要で最初から一人で論文がかける人は殆どいないように思います。病院に勤務する私達は若い先生方に正しい論文の書き方を指導しなければなりませんし、将来、質の高い雑誌への投稿を目指していく医師を多く育てていかねばなりません。この雑誌は論文投稿経験の少ない若い先生方が指導を受けながら論文の書き方から投稿までを学べることから貴重といえます。今後、この雑誌が今まで以上に内容が充実し更なる発展を遂げることを心より期待しております。最後になりましたが、ご多忙の中、発刊にご協力いただいた関係各位に深謝し巻頭言と致します。